

# 倫敦消息

夏目漱石

青空文庫



(前略) それだから今日すなわち四月九日の晩をまる潰つぶしにして何か御報知をしようと思う。報知したいと思う事はたくさんあるよ。こちらへ来てからどう云うものかいやに人間が真面目まじめになつてね。いろいろな事を見たり聞いたりするにつけて日本の将来と云う問題がしきりに頭の中に起る。柄がらにないといつてひやかしたまうな。僕のようなものがかかる問題を考えるのは全く天氣のせいや「ビステキ」のせいではない天の然らしむるところだね。この国の文学美術がいかに盛大で、その盛大な文学美術がいかに国民

の品性に感化を及ぼしつつあるか、この国の物質的開化がどのくらい進歩してその進歩の裏面にはいかなる潮流が横わりつつあるか、英国には武士という語はないが紳士と「いう」言があつて、

その紳士はいかなる意味を持つているか、いかに一般の人間が鷹お揚うようで勤勉であるか、いろいろ目につくと同時にいろいろ癩しやくさわに障

る事が持ち上つて来る。時には英吉利イギリスがいやになつて早く日本へ

帰りたくなる。するとまた日本の社会のありさまが目に見えてたのもしくはない情けないような心持になる。日本の紳士が徳育、体育、美育の点において非常に欠乏しているという事が気にかかる。その紳士がいかに平気な顔をして得意であるか、彼らがいかに浮華であるか、彼らがいかに空虚であるか、彼らがいかに現在の日

本に満足して己らが一般の国民を墮落の淵ふちに誘いつつあるかを知らざるほど近視眼であるかなどというようないろいろな不平が持ち上ってくる。せんだって日本の上流社会の事に関して長い手紙を書いて親戚へやった。しかしこんな事はただ英国へ来てから余よ慶けいに感ずるようになったまででちつとも英国と関係のない話だし、君らに聞せる必要もなし、聞きたい事でもなからうから先ぬきとして何か話そう。何がいいか、話そうとすると出ないものでね、困るな。仕方がないから今日起きてから今手紙をかいているまでの出来事を「ほととぎす」で募集する日記体でかいて御目にかけてよう。出来事だつて風来山人の生活だから面白おかしい事はない、すこぶる平凡な物さ。「オキスフォード」で「アン」を見

失ったとか、「チエヤリングクロス」で決闘を見たとか云うのだと張合があるが、いかにも憫然びんぜんな生活だからくだらない。しかし僕が倫敦ロンドンに来てどんな事をやっているかがちよつと分る。僕を知っている君らにはそこに少々興味があるだろう。

この前の金曜が「グード・フライデー」で「イースター」の御祭の初日だ。町の店はみんなやすんで買物などはいっさい禁制だ。明る土曜はまず平常の通りで、次が「イースター・サンデー」また買物を禁制される。翌日になってもう大丈夫と思うと、今度は「イースター・モンデー」だというのでまた店をとじる。火曜になつてようやくもとに復する例である。内の夫婦は御祭中田舎いなかの妻君の里へ旅行した。田中君は「シエクスピヤ」の旧跡を探ると

いうので「ストラトフオドオンアヴォン」と云う長い名の所へ行かれた。跡あとは妻君の妹と下女のペンと吾輩と三人である。

朝目がさめると「シャツター」の隙間すきまから朝日がさし込んで眩まばゆいくらいである。これは寝過したかと思つて枕の下から例のニツケルの時計を引きずり出して見るとまだ七時二十分だ。まだ第一の銅鑼どらの鳴る時刻でない。起きたつて仕方がないが別にねむくもない。そこでぐるりと壁の方から寝返りをして窓の方を見てやつた。窓の両側から申訳のために金かなきん巾ぬすだか麻あしだか得えたい体の分らない窓掛が左右に開かれています。その後「シャツター」が下りていて、その一枚一枚のすき間から御天道おてんとうさま様が御光来である。ハハ——いよいよ春めいて来てありがたい、こんな天気は倫敦じゃ拝め

なかりうと思つていたが、やはり人間の住んでる所だけあつて日の当る事もあるんだなとちよつと悟りを開いた。それから天<sup>てんじよ</sup>

井<sup>う</sup>を見た。不相<sup>あいかわらず</sup>變<sup>あ</sup>ひびが入つていて不景氣だ。上で何かごと

ごとという音が聞こえる。下女が四階の室で靴でもはいているんだらう。部屋はますますあかるくなる。銅鑼はまだ鳴りそうな景色がない。今度は天井から眼をおろしてぐるぐる部屋中を檢査した。しかし別に見るものも何にもない。まことに御恥しい部屋だ。窓の正面に箆<sup>たんす</sup>筩がある。箆筩<sup>たんす</sup>というのはもつたいたない、ペンキ塗の箱だね。上の引出に股引とカラとカフが這<sup>はい</sup>入つていて、下には燕<sup>え</sup>尾<sup>び</sup>服<sup>ふく</sup>が這入つている。あの燕尾服は安かつたがまだ一度も着た事がない。つまらないものを作つたものだなと考へた。箱の上に

尺四方ばかりの姿見があつてその左りに「カルルス」泉の瓶びんが立たつている。その横から茶色のきたない皮の手袋が半分見える。箱の左側の下に靴が二足、赤と黒だ、並んでいる。毎日穿はくのは戸の前に下女が磨みがいておいて行く。そのほかに礼服用の光る靴が戸棚とだなにしまつてある、靴ばかりは中々大臣だなど少々得意な感じがする。もしこの家を引越すとするとこの四足の靴をどうして持つて行こうかと思ひ出した。一足は穿はく、二足は革靴かぽんにつまるだろう、しかし余る一足は手にさげる訳には行かん、裸で馬車の中へ投ほうり込むか、しかし引越す前には一足はたしかに破れるだろう。靴はどうでもいいが大事の書物がずいぶん厄介だ。これは大変な荷物だなど思つて板の間に並べてある本と、煖炉だんろの上にある本と、

机の上にある本と、書棚にある本を見廻した。せんだつて「ロツチ」から古本の目録をよこした「ドツズレー」の「コレクシヨン」がある。七十円は高いが欲しい。それに製本が皮だからな。この前買った「ウアートン」の英詩の歴史は製本が「カルトバー」で古色蒼然そうぜんとしていて実に安い掘出し物だ。しかし為替かわせが来なくて本も買えん、少々閉口するな、そのうち来るだろうから心配する事も入るまい、……ゴンゴンそら鳴った。第一の銅鑼だ、これから起きて仕度をするると第二の「ゴング」が鳴る。そこでノソノソ下へ降りて行って朝食を食うのだよ。起きて股引を穿はきながら、子ねにふし銅鑼に起きはどうだろうと思つて一人でニヤニヤと笑つた。それから寢台を離れて顔を洗う台の前へ立つた。

これから御化粧が始まるのだ。西洋へ来ると猫が顔を洗うように簡単に行かんでまことに面倒である。瓶の水をジャーと金盥の中へあけてその中へ手を入れたがああしまった顔を洗う前に毎朝カルルス塩を飲まなければならぬと気がついた。入れた手を盥から出した。拭くのが面倒だから壁へむいて二三返手をふつてそれから「カルルス」塩の調合にとりかかった。飲んだ。それからちよつと顔をしめして「シエヴィング・ブラツシ」を攫んで顔中むやみに塗廻す。剃は安全髪剃だから仕まつがよい。大工がかななをかけるようにスースーと髭をそる。いい心持だ。それから頭へ櫛を入れて、顔を拭て、白シャツを着て、襟を掛けて、襟飾をつけて「シャツター」を捲き上ると、下女がボコンと部屋

の前へ靴をたたきつけて行つた。しばらくすると第二のゴンゴンが鳴る。ちよつと御おあつらえ誂おつらえ通りにできてる。それから階はしご子段だんを二つ下りて食堂へ這入る。例のごとく「オートミール」を第一に食う。これは蘇格スコットランド士蘭人の常食だ。もつともあつちでは塩を入れて食う、我々は砂糖を入れて食う。麦の御粥おかゆみたようなもので我輩は大好きだ。「ジョンソン」の字引には「オートミール」……蘇国にては人が食ひ英国にては馬が食うものなりとある。しかし今の英国人としては朝食にこれを用いるのが別段例外でもないよ。うだ。英人が馬に近くなつたんだらう。それから「ベーコン」が一片に玉子一つまたはベーコン二片と相場がきまつている。そのほかに焼パン二片茶一杯、それでおしまいだ。吾輩が二片の「ベ

「コン」を五分の四まで食おわいたところへ田中君が二階から下りて来た。先生は昨夜遅く旅から帰つて来たのである。もつとも先生は毎朝遅刻する人でけつして定刻に二階から天下つた事はない。「いや御早う」。妻君の妹が Good morning と答えた。吾輩も英語で Good morning といつた。田中君はムシャムシャやつてゐる。吾輩は Excuse me といつて食卓の上にある手紙を開いた。「エツジヒル」夫人からこの十七日午後三時にゆるゆる御話しを伺いたいからおいでくだされまじきやという招待状だ。おやおやと思つた。吾輩は日本におつても交際は嫌きらいだ。まして西洋へ来て無弁舌なる英語でもつて 窮きゆうくつ 窟くつな交際をやるのはもつとも厭きらいだ。加之倫ロンドン敦は広いから交際などを始めるとむやみに時間を

つぶす、おまけにきたない「シャツ」などは着て行かれず、「ズボン」の膝ひざが前へせり出してはまずいし雨のふる時などはなさない金を出して馬車などを驕おごらねばならないし、それはそれは氣骨が折れる、金がいる、時間が費つえる、真平だが仕方がない、たまにはこんな酔興な貴女があるんだから行かなければ義理がわるい、困ったなと思つてしていると、田中君が旅行談を始めた。吾輩に「シエクスピヤ」の石膏せっこうせい製の像と「アルバム」をやろうと云うからありがとうといつて貰つた。それから「シエクスピヤ」の墓碑いしずりの石摺いしずりの写真を見せて、こりや何だい君、英語の漢語だね、僕には読めないといった。やがて先生は会社へ出て行つた。これから吾輩は例の通り「スタンダード」新聞を読むのだ。西洋の新

聞は実にでがある。始からしまいまで残らず読めば五六時間はかかるだろう。吾輩はまず第一に支那事件のところを読むのだ。今日の中には魯国新聞の日本に対する評論がある。もし戦争をせねばならん時には日本へ攻め寄せるは得策でないから朝鮮で雌雄しゆうを決するがよかろうという主意である。朝鮮こそ善い迷惑だと思った。その次に「トルストイ」の事が出ている。「トルストイ」は先日ロシアの国教を蔑視べっしすると云うので破門されたのである。天下の「トルストイ」を破門したのだから大騒ぎだ。或る絵画展覽会に「トルストイ」の肖像が出ているとその前に花が山をなす、それから皆が相談して「トルストイ」に何か進物をしようなんかんて「トルストイ」連は焼気やつきになって政府に面つらあて当あてをしているという

通信だ。面白い。そうこうする内に十時二十分だ。今日は例のごとく先生の家へ行かねばならない。まず便所へ行つて三階の部屋へかけ上つて仕度したくをして下りて見るとまだ十一時には二十分ばかり間がある。また新聞を見る。昨日は「イースター・モンデー」なのでとどころどころで興行物があつた。その雑報がある。「アクエリアム」で熊使いが熊を使うと云う事が載っている。熊が馬へ乗つて埒うちの周囲をかけ廻る、棒を飛び超える、輪抜けをすると書いてある。面白そうだ。此度は広告を見た。「ライシウム」で「アーヴィング」が「シエクスピヤ」の「コリオラナス」をやると出ている。せんだつて「ハー・マジエスチー」座で「トリー」の「トエルフスナイト」を見た。脚本で見るより遙はるかに面白い。

「アーヴィング」のも見たいものだ。十一時五分前になった。書物を抱えて家を出た。

僕の下宿は東京で云えばまず深川だね。橋向うの場末さ。下宿料が安いからかかる不景気なところにしばらく——じゃない、つまり在英中は始終しじゆう蟄息ちっそくしているのだ。その代り下町へは滅多めったに出ない。一週に一二度出るばかりだ。出るとなると厄介だ。まず「ケニントン」と云う処まで十五分ばかり徒行あいて、それから地下電気でもって「テームス」川の底を通って、それから汽車を乗換えて、いわゆる「ウエスト・エンド」辺に行くのだ。停車場まで着つて十銭払って「リフト」へ乗った。連つれが三四人ある。駅夫が入口をしめて「リフト」の繩なわをウンと引くと「リフト」がグー

ツとさがる、それで地面の下へ抜け出すという趣向さ。せり上る時はセビロの仁木弾正につきだんじょうだね。穴の中は電気灯であかるい。汽車は五分ごとに出る。今日はすいている、善按排いあんぱいだ。隣りのものも前のものも次の車のものも皆新聞か雑誌を出して読んでいる。これが一種の習慣なのである。吾輩は穴の中ではどうしても本などは読めない。第一空気が臭くさい、汽車が揺れる、ただでも吐きそうだ。まことに不愉快極まる。停車場を四ばかりこすと「バンク」だ。ここで汽車を乗りかえて一の穴からまた他の穴へ移るのである。まるでもぐら持ちだね。穴の中を一町ばかり行くといわゆる two pence Tube さ。これは東「バンク」に始まって倫ロンドン敦をズツト西へ横断している新しい地下電気だ。どこで乗ってもどこで下

りても二文すなわち日本の十銭だからこう云う名がついている。乗った。ゴーと云つて向うの穴を反対の方角に列車が出るのを相図に、こっちの列車もゴーと云つて負けない気で進行し始めた。車掌が next station Post-office といつてガチャリと車の戸を閉めた。とまるたびにつぎの停車場の名を報告するのがこの鉄道の特色なのである。向うの方に若い女と四十かっこう恰好の女が差し向いに座を占めていた。吾輩の右に一間ばかり隔へだたつて婆さんと娘がベチャベチャ話しをしている。向うの連中は雑誌を読みながら「ビスケット」か何かかじっている。平凡な乗合だ。少しも小説にならない。もう厭いやになつたからこれで御免蒙ごめんこうむる。実は僕の先生の話しをしたいのだがね。よほど奇人で面白いのだから。しかし少

々頭がいたいからこれで御勘弁を願おう。四月九日夜。

二

また「ホトトギス」が届いたから出直して一度伺おう。我輩の下宿の体裁は前回申し述べたごとくすこぶる憐あわれっぽい始末だが、そういう境きょうがい界がいに澄まし返つて三十代の顔がんしぜん子然ぜんとしていられるかと君方はきつと聞くに違いない。聞かなくつても聞く事にはないとこつちが不都合だからまず聞くと認める。ところで我輩が君らに答えるんだ、懸かけ価ねのないところを答えるんだから、そのつもりで聞かなくつては行けない。

我輩も時には禅坊主みたような変哲学者のような悟りすました事も云つて見るが、やはり大体のところは御存じのごとき俗物だからこんな窮屈な暮しをして回かいやその樂をあらためず賢なるかなと褒ほめられる権利は毛頭ないのだよ。そんならなせもつと愉快な所へ移らないかと云うかも知れないが、そこに大に理由の存するあり焉さ。まず聞きたまえ。なるほど留學生の学資は御話にならないくらい少ない。倫ロンドン敦ではなおなお少ない。少ないがこの留学費全体を投じて衣食住の方へ廻せば我輩といえども最も少すこしは樂な生活ができるのさ。それは国にいる時分の体面を保つ事はおぼつか覺束ないが（国にいれば高等官一等から五つ下へ勘かんじょう定すれば直ぐ僕の番へ巡まわつてくるのだからね。もつとも下から勘定す

れば四つで来てしまふんだから日本でもあまり威張れないが）と  
にかくこれよりもさつぱりした家へ這はい入れる。然るにあらゆる節  
儉をしておかようなわびしい住居すまいをしているのはね、一つは自分  
が日本におつた時の自分ではない単に学生であると云う感じが強  
いのと、二つ目にはせつかく西洋へ来たものだから成る事なら一  
冊でも余計専門上の書物を買つて帰りたい慾があるからさ。そこ  
で家を持つて下婢かひ共を召し使つた事は忘れて、ただ十年前大学の  
寄宿舎で雪駄せったのカカトのような「ビステキ」を食つた昔しを考え  
てはそれよりも少しは結構？　まず結構だと思つているのさ。人  
は「カムバーウエル」のような貧乏町にくすぼつてると云つて笑  
うかも知れないがそんな事に頓とん着じゃくする必要はない。かような

陋巷ろうこうにおつたつて引張りと近づきになつた事もなし夜鷹よたかと話をした事もない。心の底までは受合わないがまず挙動だけは君子のやるべき事をやっているんだ。実に立派なものだと自ら慰めている。

しかしながら冬の夜のヒューヒュー風が吹く時にストーヴから煙りが逆戻りをして室の中が真黒に一面に燻いぶるときや、窓と戸の障しょうじ子の隙間すきまから寒い風が遠慮なく這はい込んで股から腰のあたりがたまらなく冷たい時や、板張の椅子が堅くつて疝せんきもち氣持の尻のように痛くなるときや、自分の着ている着物がぜんぜん変色して来るにつれて自分がだんだん下落するような情ない心持のする時は、何のためにこんな切りつめた生活をするんだらうと思う事もある。

エー構わない。本も何も買えなくても善いから為替はみんな下宿料にぶち込んで人間らしい暮しをしようという気になる。それからステッキでも振り回わしてその辺を散歩するのである。向へ出て見ると逢う奴も逢う奴も皆んな厭いやに背せいが高い。おまけに愛あい嬌ようのない顔ばかりだ。こんな国ではちつと人間の背せいに税をかけたら少しは儉約した小さな動物が出来るだろうなどと考えるが、それはいわゆる負惜しみの減らず口と云う奴で、公平な処が向うの方がどうしても立派だ。何となく自分が肩身の狭い心持ちがする。向うから人間並外れた低い奴が来た。占しめたと思つてすれ違つて見ると自分より二寸ばかり高い。こんどは向うから妙な顔色をした一寸法師が来たなと思うと、これすなわち乃だい公こう自身の影が

姿見に写ったのである。やむをえず苦笑いをする。やむをえず苦笑いをする。これは理の当然だ。それから公園へでも行くと角兵衛獅子に網を被<sup>かぶ</sup>せたような女がそろそろ歩<sup>あ</sup>行<sup>る</sup>いている。その中には男もいる。職人もいる。感心に大概は日本の奏任官以上の服装をしている。この国では衣服では人の高下が分らない。牛肉配達などが日曜になるとシルクハットでフロックコートなどを着て澄している。しかし一般に人氣が善<sup>よ</sup>い。我輩などを捕えて悪口をついたり罵<sup>の</sup>つたりするものは一人もおらん。ふり向いても見ない。当地では万事鷹揚<sup>おうよう</sup>に平氣にしているのが紳士の資格の一つとなっている。むやみに巾着<sup>きんちやく</sup>切りのようにこせこせしたり物珍らしそうにじろじろ人の顔などを見るのは下品となっている。ことに

婦人などは後ろをふりかえって見るのも品が悪いとなっている。

指で人をさすなんかは失礼の骨頂だ。習慣がこうであるのにさすが  
ロンドン  
が倫敦は世界の勸工場かんこうばだからあまり珍らしそうに外国人を玩が  
弄んろうしない。それからたいいていの人間は非常に忙がしい。頭の中

が金の事で充満しているから日本人などを冷かしている暇がない  
というような訳で、我々黄色人——黄色人とは甘うまくつけたものだ。

全く黄色い。日本にいる時はあまり白い方ではないがまず一通り  
の人間色という色に近いと心得ていたが、この国ではついに人  
間ひとを去いる三さん舎しゃ色と言わざるを得ないと悟った——その黄色人  
がポクポク人込の中を歩ある行あるいたり芝居や興行物などを見に行かれ  
るのである。しかし時々是我輩に聞えぬように我輩の国元を気に

して評する奴がある。この間或る所の店に立って見ていたら後ろから二人の女が来て “least poor Chinese” と評して行った。least poor とは物匂い形容詞だ。或る公園で男女二人連があれは支那人だいや日本人だと争っていたのを聞いた事がある。二三日前さる所へ呼ばれてシルクハットにフロックで出かけたなら、向うから来た二人の職工みたような者が a handsome Jap. といった。ありがたいんだか失敬なんだか分らない。せんだって或芝居へ行つた。大入で這はい入れないからガレリーで立見をしていると傍のものが、あすこにいる二人は葡萄ポルトガル耳人だろうと評していた。——こんな事を話すつもりではなかった。話しの筋が分らなくなつた。ちよつと一服してから出直そう。

まず散歩でもして帰るとちよつと気分が變つて来て晴々する。

何こんな生活もただ二三年の間だ。国へ帰れば普通の人間の着る物を着て普通の人間の食う物を食つて普通の人の寝る処へ寝られる。少しの我慢だ、我慢しろ我慢しろ、と独り言をいって寝てしまふ。寝てしまふ時は善いが、寝られないでまた考え出す事がある。元來我慢しろと云うのは現在に安んぜざる訳だ——だんだん事件がむずかしくなつて来る——時々やけの気味になるのは貧苦がつらいのだ。年來自分が考えたまた自分が多少実行し来りたる処世の方針はどこへ行つた。前後を切断せよ、妄りに過去に執着するなかれ、いたずらに将来に望を属するなかれ、満身の力をこめて現在に働けというのが乃だいこう公の主義なのである。しかるに国

へ帰れば樂ができるからそれを樂しみにしんぼう辛防しようと云うのは  
はかない考だ。国へ帰れば樂をさせると受合つたものは誰もない。  
自分がきめているばかりだ。自分がきめてもいいから樂ができない  
かつた時にすぐきぼう機鋒を転じて過去のもうそう妄想を忘却し得ればいいが、  
今のように未来に御願ひ申しているようではどうていその未来が  
満足せられずに過去と変じた時にこの過去をさらりと忘れる事は  
できまい。のみならず報酬を目的に働らくのは野暮やぼの至りだ。死  
ねば天堂へ行かれる、未来は雨あまがえる蛙かえるといつしよに蓮の葉に往生  
ができるから、この世で善行をしようという下卑た考と一般の論  
法で、それよりもなお一層陋ろうれつ劣な考だ。国を立つ前五六年の間  
にはこんな下等な考は起さなかつた。ただ現在に活動したただ現在

に義務をつくし現在に悲喜憂苦を感ずるのみで、取越苦勞や世迷言や愚痴ぐちは口の先ばかりでない腹の中にもたくさんかつた。それで少々得意になつたので外国へ行つても金が少なくなつても一いった筆んの食いっぴよう一瓢ひょうの飲然のんきと呑氣しやらくに洒落しやくらくにまた沈着しんせきに暮くされると自負じぶしつつかつたのだ。自惚うぬぼれ自惚うぬぼれ！ こんな事では道を去る事三千里。まず明日からは心を入れ換えて勉強専門の事。こう決心して寝てしまふ。

かかるありさままでこの薄暗い汚苦しい有名なカンバーウエルと云う貧乏町の隣町に昨年こぞの末から今日までおつたのである。おつたのみならずこの先も留学期限りゅうがくぎげんのきれるまではここにおつたかも知れぬのである。しかるにここに或る出来事が起つていくらおり

たくつても退去せねばならぬ事となつた、というとか小説的だが、その訳を聞くとすこぶる平凡さ。世の中の出来事の大半は皆平凡な物だから仕方がない。この家はもとからの下宿ではない。去年までは女学校であつたので、ここの神かみさんと妹が経験もなく財産もなく将来の目的もしかと立たないのに自営の道を講ずるためにこの上品のような下等のような妙な商しょうばい買ばいを始めたのである。彼らは固もとより不正な人間ではない。正道を踏んで働けるだけ働いたのだ。しかし耶蘇教ヤソキョウの神様も存外半間はんまなもので、こういう時にちよつと人を助けてやる事を知らない。そこでもつて家賃が滞とどこおる——倫敦ロンドンの家賃は高い——借金ができる、寄宿生の中に熱病はやが流行はやる。一人退校する、二人退校する、しまいに閉校する。

……運命が逆まに回転するところ行くものだ。可憐なる彼ら——  
 可憐は取消そう二人とも可憐という柄ではない——エー不憫なる  
 ——憫然なる彼らはあくまでも困難と奮戦しようという決心でつ  
 いに下宿を開業した。その開業したての煙の出ているところへ我  
 輩は飛び込んだのである。飛び込んでからだんだん事情を聞いた  
 ときにこんどこそはこの二人の少女、ではない我輩より三寸ばか  
 り背いの高い女に成功あらしめたまえと私かに祈念を凝らした。  
 誰れに祈念を凝らしたと聞かれると少々困る。祈るべき神に交際  
 の無い拙者だから、ただあてどもなく祈念した。果せるかないつ  
 こう靈現がない。ちつとも客が来ない。「夏目さん、あなたの御  
 存じの方でいらしっていただく方はありますまいか」「さよう、

実に御氣の毒だから周旋したいのだが、ロンドン倫敦には別に朋友ほうゆうと  
いうものがないから——」。それでもせんだつてまでは日本人が  
一人おつた。この先生はすこぶる陽気な人でこんな家には向かな  
い。我輩がほととぎすを読んでいるのを見て、君も天智天皇の方  
はやれるのかいと聴きた男だ。その日本人がとうとう逃出す。残る  
は我輩一人だ。こうなると家を畳むより仕方がない。そこでこれ  
から南の方にあたる倫敦の町外れ——町外れと云つても倫敦は広  
い、どこまで広がるか分らない——その町外れだからよほど辺鄙へんぴ  
な処だ。そこに恰かつこう好こうな小奇麗こぎれいな新宅があるので、そこへ引越そ  
うという相談だ。或日亭主と神かみさんが出て行つて我輩と妹が差し  
向いで食事をしてしていると陰気な声で「あなたもいっしょに引越し

て下さいますか」といった。この「下さいますか」が色気のある小説的の「下さいますか」ではない。色沢気抜きの世帯染しよたいじみた「下さいますか」である。我輩がこの語を聞いたときは非常にいやな可愛想な気持ちでした。元来我輩は江戸っ児だ。しかるに朱引内か朱引外か少々曖昧あいまいな所で生れた精せいか知らん今まで江戸っ児のやるような心持ちのいい慈善的事業をやった事がない。今何と答をしたかたしかに覚えておらん。いやしくも一遍の義侠心ぎぎやうしんがあるならば、うんあなたの移る処ならどこでも移ります、と答えるはずなのだ。そうは答えなかつたらしい。ここにそう答えられない訳がある。なるほどこの妹はごく内気なおとなしいしかも非常に堅固な宗教家で、我輩はこの女と家を共にするのは毫ごうも不

愉快を感じないが、姉の方たる少々御転おてんだ。この姉の経歴談きいも聞  
たが長くなるから抜きにして、ちよつと小生の氣に入らない点を  
列挙するならば、第一生意氣だ、第二知つたかぶりをする、第三  
つまらない英語を使つてあなたはこの字を知つておいでですかと  
聞く事がある。一々勘かんじよう定じようすれば際限がない。せんだつてトン  
ネルと云う字を知つているかと聞た。それから straw すなわち藁わら  
という字を知つているかと聞た。英文学専門の留学生もこうなる  
と怒る張合もない。近頃は少々見当がついたと見えてそんな失敬  
な事も言わない。また一般の挙動も大に叮嚀ていねいになつた。これは  
漱石が一言の争もせず冥めいめい々の裡うちにこの御転婆を屈伏せしめたの  
である。——そんな得意談はどうでも善よいとして、この国の女こ

とに婆さんとくると、いわゆる老婆親切と云う訳かも知れんが、自分の使う英語に頼みもせぬ註解を加えたり、この字は分りますかなどという事がたくさんある。この間さる処へ呼ばれてその奥さんと談しはなをした。するとその人が大の耶蘇ヤソ信者だからたまらない。滔とうとう々と神徳を述べ立てた。まことに品の善い、しとやかな御婆さんだ。しかる処 evolution と云う字を御承知ですかと聞かれた。「世の中の事は乱雑で法則がないようですがよく御覧になると皆進化の道理に支配されております……進化……分りますか」。まるで赤ん坊に説教するようだ。向は親切むこうに言つてくれるんだから、へーへーと云っているより仕方がない。それはこの婆さんのようにベラベラしゃべる事はできない。挨拶あいさつなどもただ

咽喉のどの処へせり上つて来た字を使ってほつと一息つくくらいの仕儀なんだから向うでこつちを見くびるのは無理はないが、離れ離れの言語の数から云えばあなたよりも我輩の方が余計知っておりますよといつてやりたいくらいだ。それからよく御婆さんを引合に出すが、もう一人御婆さんがある。この御婆さんがせんだつて手紙をよこしてその中にfolkという字を使っている。ただ使っているばかりなら不思議はないが、その字にfoot noteが付いている。これは英国古代の字なりとあつた。「ノート」を自分の手紙へつけるのも面白いが、そのノートの文句がなおさら面白い。この御婆さんと船へ合乗をした時に、何か文章を書け、直してやるというから、日記の一節を出してよろしくおたのもうす事にし

た。すると大変感心したといつて二三所一二字添削して返した。見ると直さなくつてもけつしてさしつかえ差支のない所を直している。そしてとんでもない間違つた事が例のノートの書いている。この御婆さんはけつして下等な人でない。相応な身分のある中流の人である。かくのごとき人間にかいこう邂逅する英国だから、我下宿の妻君が生意気な事を云うのも別段相手にする必要はないが、同じ英国へ来たくらいなら今少し学問のある話せる人の家におつて、汚ない狭いは苦にならないから、どうか朝夕交際がして見たい。こう云う望があるから、へー行きましようとは答えなかつたが、自分の望み通りの人で下宿人を置く処があるかそれがすこぶる疑わしい。広い世界にはあるだろう。けれどもそれにほうちやく逢着する

のは難中の難事である。我輩の先生の処が一問あいておれば置てもらうのだけれども、それは間がないのだからできない相談だ。

こう云う時になると西洋の新聞は便利だ。万事広告の世界なのだから下宿の広告がいくらでもある。我輩が以前下宿をさがす時 *Daily Telegraph* の下宿の広告欄を見た事がある。始めから終りま

で読むのに三時間かかった事を記憶きおくしている。今は「テレグラフ」

を取っておらん、「スタンダード」だ。この新聞は上品な新聞だからここへ出る広告なら間違はないと思つて四月十七日の分の広告欄を読み始めると、存外営業的のが多くつて素人家へ置きたいと云うのが少ない。しかしいろいろのがある。「宿料低廉、風呂付、食物上等」こんなのは普通なのだ。「ハイドパークに面し地

下電気へ三分地下鉄道へ五分、貴女と交際の便利あり」なんと云うのがある。「球突随意ピヤノあり gay society, late dinner」ゝねも珍らしくない。「レートジンナー」と云うのはこの頃の流行なのだ。我輩わがはいなどには至極しごく不便だ。その中で下のようなを見出した。「立派なる室を有する寡婦及其の妹と共に同宿せんとするあまり派出やかならざる紳士を求む。御望の方は〇〇筆墨店へ御一報を乞う」。まずここへでも一つあたってみようと云う氣になつたから直ぐ手紙を書いて、宿料その他委細の事を報知して貰いたい、小生の身分はかくかく職業はかくかく、なるべく低廉でなるべく愉快な処に住みたいと勝手な事をかいてやつた。

その夜の十時頃自分の室へやで読書をしていると、室の戸をコツコ

ツ叩くものがある。『Yes, come in.』とこつたら宿の亭主が「ニコして這入<sup>はい</sup>つて来た。『実はあなたも御承知の通りこの度引越す事にきまりましたが、どうでしょう、向うはここよりも大分奇麗<sup>れい</sup>でかつ器具などもよほど上等にしますが、来ていただく訳には参りますまいか』それは君の方で僕に是非来てくれと言うのなら……」「イエ是非といつて御無理を願う訳ではありませんが、御都合がよければ——実は御馴染<sup>おなじみ</sup>にもなっておりますし家内や妹も大変それを希望致しますから」『君の新宅へ下宿人を置きたいという事は僕も承知していますが、あながち僕でなくつても善<sup>よ</sup>いだろうと思つてね』と実はこれこれだと話すと、亭主の顔が少々陰気になつて来た。我輩も少々手持無沙汰<sup>てもちぶさた</sup>である。「それじゃこ

うしよう、いずれ先方から返事が来る、来ればひとまず行って室を見て、それが気に入らなかつたら君の方へ行くとしよう、ほかを探す事はやめにして。あの手紙を出す前に君の方の希望がどのくらいの程度だか分つていけば、聞き合せるまでもない御望みに応じたのだが、こうなつては仕方がない。まず先方の返事次第です。その代りほかはけつしてさがさない。あれがいけなければきつと君の方へ行きますよ」。亭主は御邪魔様といつて下りて行つた。

朝になつて食堂へ行くと誰もいない。皆んな飯をすました後である。ああ今日も寝坊して気の毒だなど思つて「テーブル」の上を見ると、うすむらさきいろ薄紫色の状袋の四隅を一分ばかり濃いすみれいろ堇色

に染めた封書がある。我輩に來た返事に違くない。こんな表の状袋を用るくらいでは少々我輩の手に合わん高等下宿だなど思ながら「ナイフ」で開封すると、「御問合せの件に付申上候。この家はレデー（このレデーという字の下に棒が引いてある）の所有にて室内の裝飾の立派なるはもちろん室々はことごとく電気灯を用いよき召使を雇い高尚優雅なる生活に適するように意を用い候。

宿料は一週三十三円に御座候。あるいは御氣に召さぬかと存じ候えども、御出被下候おいでくだされえば喜こんで室々御案内つかまつるべく可仕候、敬

具」。飯を食いながら呼鈴を押して宿の神かみさんと呼んだ。「とうとうあなたの方へ行く事にしましたよ。一週三十三円の下宿料なんかとうてい我輩には払えんから君の方へ行きましようよ」「は

あそうですか、どうもありがとう、なるべく気をつけますからどうぞさよう願いたいもので」。細君が出て行つた後から亭主の首が半分戸の間から出た。Thank you, Mr. Natsume, thank you. と言つてニコニコ笑つた。我輩も少々嬉しいうれような心持ちがした。細君と妹は引越しの荷ごしらえで終日急がしい。七時に茶を飲むときに食堂で逢あつた。「今日は飼つていた鸚鵡おうむを売りました」と妹がいった。姉もまけずに「前使つた学校の招牌かんばんも売りました。十円に買つて行きました」と云つた。

運命の車は容赦なく廻転しつつある。我輩の前および彼ら二人の前にはいかなる出来事が横わりつつあるか。我らは三人ながら愚な事をしていくかも知れぬ。愚かも知れぬ、また利口かも知れ

ぬ。ただ我輩の運命が彼ら二人の運命と漸々接近しつつあるは事實である。後を顧みてかの薄紫の貴女及びその妹の事とその門もんが構ま付えつきの家を想像し、前を見てこの貧困なるしかし正直なる二人の姉妹とその未来の樂園と予期しつつある格子戸こうしどづく作りを想像して、両者の差違を趣味あるようににも感ずる。また貧富の懸隔はかように色気なき物かとも感ずる。またミカウバーと住んでおつたデヴィッド・カツパーフィールドのような感じもする。四月二十日。

ほうゆう

朋友その朋友と共に我輩が生活を共にするところの朋友姉妹

の事については前回少しく述ぶるところあつたが、このほかに我

輩がもつとも敬服しもつとも辟易へきえきするところの朋友がまだ一人

ある。姓はペン渾名あだなは Bedge pardon なる聖人の事を少しく報道し

ないでは何だか気がすまないから、同君の事をちよつと御話して、

次回からは方面の変つた目撃談觀察談を御紹介仕ろう。そもそも

このペンすなわち内の下女なるペンになぜ我輩がこの渾名を呈し

たかと云うと、彼は舌が短かすぎるのか長すぎるのか呂律ろれつが少々

廻り兼ねる善人なる故に I beg your pardon と云う代りにいつでも

Bedge pardon と云うからである。ベッジ・パードンは名のごとく

いかにもベッジ・パードンである。しかし非常な能弁家で、彼の

舌の先から唾液だえきを容赦なく我輩の顔面に吹きかけて話し立てる時などは滔々とうとう滾こん々こんとして惜おしい時間を遠慮なく人に潰つぶさせてごう毫も氣の毒だと思わぬくらいの善人かつ雄弁家である。この善人にして雄弁家なるベツジパードンは倫敦ロンドンに生れながらまるで倫敦の事を御存じない。田舎いなかは無論御存じない。また御存じなさりたくもない様子だ。朝から晩まで晩から朝まで働き続けに働いてそれから四階のアツチックへ登って寝る。翌日日出ると四階から天降あまくだつてまた働き始める。息をセッセとはずまして——彼は喘息ぜんそく持もちである——はたから見るのも氣の毒なくらいだ。さりながら彼は毫も自分ごうに対して氣の毒な感じを持っておらぬ。Aの字かBの字か見当けんとうのつかぬ彼は少しも不自由らしい様子がない。

我輩は朝夕この女聖人に接して敬慕の念に堪たえんくらいの次第であるが、このペンに捕つて話しかけられた時は幸か不幸かこれは他人に判断して貰うより仕方がない。日本にいる人は英語なら誰の使う英語でも大概似たもんだと思つてゐるかも知れないが、やはり日本と同じ事で、国々の方言があり身分の高下がありなどで、それはそれは千違万別である。しかし教育ある上等社会の言語はたいてい通ずるから差さ支しないが、この倫ロンドン敦のコツクネーと称する言語に至つては我輩にはとうてい分らない。これは当地の中流以下の用うる語ことばで字引にないような発音をするのみならず、前の言ばと後の言ばの句切りが分らないことほどさよう早く饒舌しゃべるのである。我輩はコツクネーでは毎度閉口するが、ベツ

ジパードンのコツクネーに至つては閉口を通り過してもう一遍閉口するまで少々草くたびれ臥るから開口一番ちよつと休まなければやり切れないくらいのものだ。我輩がここに下宿したてにはしばしばペンの襲撃を蒙こうむつて恐縮したのである。やむをえずこの旨を神かみさんかみに届け出ると、可愛想にペンは大變御小言を頂戴した。御客様にそんなぶしつけな方ほうがあるものか以後はたしなむが善かろうときめつけられた。それから従順なるペンはけつして我輩に口をきかない。ただし口をきかないのは妻君の内うちにいる時に限るので、山の神が外へ出た時には依然としてもとのペンである。もとのペンが無言の業をさせられた口惜しまぎれに折を見て元利共取返そうと云う勢でくるからたまらない。一週間無理に断食をした先生

が八日目に御櫃おひつを抱えて奮戦するの概がある。

例のごとくデンマークヒルを散歩して帰ると、我輩のために戸を開いたるペンは直ちにしやべり出した。果せるかな家内のものは皆新宅へ荷物を片かたづけ付けに行つて伽藍堂がらんどうの中に残るは我輩とペンばかりである。彼は立板に水を流すがごとく々びび十五分間ばかりノベツに何か云つているが毫ごうもわからない。能弁なる彼は我輩に一言の質問をも挟さしはさしましてめざるほどの速度をもつて弁じかけつつある。我輩は仕方がないから話しは分らぬものと諦あきらめてペンの顔の造ぞうさく作の吟味にとりかかった。温厚なる一ふたえま重ぶた瞼まぶたと先が少々逆戻りをして根に近づいている鼻とあくまで紅くれないに健全なる顔色とそして自由自在に運動を縦ほしまいまにしている舌と、舌の両脇に流

れてくる白き唾とをしばらくは無心に見つめていたが、やがて気の毒なような可愛想のようなまたおかしいような五目鮫司ごもくざしのような感じが起つて来た。我輩はこの感じを現わすために唇を曲げて少しく微笑を洩もらした。無邪気なるペンはその辺に気のつくはずはない。自分の嘸はなしに身が入いって笑うのだと我点がてんしたと見えて赤い頬えくぼに笑靨えくぼをこしらえてケタケタ笑った。この頓珍漢とんちんかんなる出来事のために我輩はいよいよ変テコな心持になる、ペンはますます乗気になる、始末がつかない。彼の云う所をあそこで一言ここで一句、分つたところだけ綜そうごう合して見るとこういうのらしい。昨日差配人が談判に来た。内の女連はバツが悪いから留守を使つて追ま返した。この玄関まの使命を完まうしたのがペンである。自分は

嘘をつくの嫌だ。神さまにすまない。しかし主命もだしがたし  
でやむをえず嘘をついた。まずたいていここら当りだろうと遠く  
の火事を見るように見当をつけてようやく自分の部屋へ引き下つ  
た。我輩のトランクと書籍は今朝三時頃主人が新宅へ運んでしま  
ったので、残るのは身体ばかりだ。何となく寂漠せきぼくの感がある。  
夜の八時頃にコツコツ戸を叩いて這入はいつて来た——例のペンが—  
—今日差配人が四度来たという注進だ。それから何かいうが少し  
も解しかねる。あまり面倒だから善い加減にして追さげる。……  
十時頃にまたペンが来た。今度差配が来たらどうしようという。  
今度は相談のためだ。心配するには及ばんといつて慰めて引きさ  
がらせる。十時半になるがまだ内のものは帰らない。もしここの

亭主が詐欺師さぎしであつて我輩を置き去りにして荷物だけ取つて行つたとすれば我輩はアンポンタンの骨頂でさぞかし人に笑われるだろうと気がついた。やがて門の戸のあく音がする。帰つたらしい。まずアンポンタンにならずにすんだ。ありがたいと寝る。

翌日が四月二十五日、九時頃起きて下へ行くと主人夫婦が今朝飯をすましたところだ。我輩が食卓につくのを相図に昨夜の騒動を御存じですかと神さんが尋ねた。我輩は三階に寝るのである。下でどんな事があつたか少しも知らない。騒動つて何があつたのですと聞くと、例の差配人との悶もんちやく着一件である。昨夜彼らから新宅から帰つて家へ這入はいる途端とたん門口に待ち設けていた差配人は、亭主が戸をしめる余地のないほど早く彼らに続いて飛び込んで、

なぜ断りなしにしかも深夜に引越をするそれでも君は紳士かと云うと、我輩が我輩の荷物をわきへ運ぶに誰に断わる必要がある。また何時に荷を出そうとこつちの勝手じやないかと亭主が抗弁する。それからだんだん議論に花が咲いて壮語四隣を驚かすと云う騒ぎであつたそうな。元来この家は神さんの名前でかりている。ところが七年前に少々家賃を滞<sup>とどこ</sup>おらしたのが今日まで崇<sup>た</sup>つていて出る事ができん。しかも彼の財産は早晚家賃のかたに取られるという始末だ。しかし憐<sup>あわ</sup>れなる姉妹は別段取押えられて困るような物も持つていない。差配もそれには目をつけておらん。ただこの老差配の目ざしているのは亭主その人の家財にある。亭主も二十世紀の人間だからその辺に抜かりはない。代言人の所へ行つてち

やんと相談している。日没後日出前なれば彼の家具を運び出して  
も差配は指を啣くわえて見物しておらねばならぬと云う事を承知して  
いる。それだから朝の三時頃から大八車をやとつて来て一晩寝ずに  
かかって自分の荷を新宅へ運んだのである。彼はすこぶる彪ぼうだい大  
なるシマリのない顔をしている。そこで申訳のために少々鼻の下  
へ髭ひげをはやしてはいるが、なかなか差配に負けぬ抜目のない男と  
見える。

我輩は亭主に自分の身体からだはいつ移れるのかと聞いたら今日でも  
よいというから、午飯ひるめしの後妻君と共に新宅へ引き移る事にした。  
神さんと二人で午飯を食っていると亭主が代言人の所から帰つ  
て来て神さんに、御前一つ手紙をかいて差配の所へ郵便でやれ書

留にしなくてはいかんといつてまた出て行つた。神さんはサラサラ何か書き始める。どんな手紙をかくか少々見たい心持でもある。やがて神さんは書き了つて「ちよつと〇〇さんこういう手紙なんです聞いて下さい」と高慢な顔をして手紙を読み始める。「拝啓妾は驚入申候。……どうですもう少しゆつくり読みましょうか……妾は驚き入申候。昨日は三度ならず四度までも留守宅へ御来臨の上下婢かひに向つて妾ら身の上に関する種々なる質問を発せられ、それのみならず無断にて人の家を搜索なされ、あまつさえ下婢に向つて妾はレデーの資格なきものなりなど余計な事を吹ふい聴ちようせられ候由、元来右はいかなる御主意に御座候や伺度候。この乱暴なる貴下の挙動に対し妾は弁解を求むる権利ありと存候。……こ

う云うのです。これがね策なんですよ」と云うから我輩も少々驚き入申しておるところだが、策つて云うのはどんな策なんですと聞くと、先生いよいよ得意だ。ようござんすか、御手紙を書いてちやんとこの通り控えをとつておくでしょう、先方でもしこの事件を裁判沙汰にする日にはこれが証拠しょうこになつて差配が乱暴を働いたという種になるのですよ。今までは女二人だと思つてずいぶん勝手な事ばかりしたのですが、今じゃ男がついているからさうばかり踏みつけられちやいませんのさ、と間接に亭主の自慢を仰せられた。それから御待遠様それでは出かけましょうと云うから出かけた。我輩は手提革靴てさげかばんの中へ雑物を押し込んですこぶる重い奴やつをさげてしかも左の手には蝙蝠こうもりとステッキを二本携えている。

レデーは網袋の中へ渋紙包を四つ入れて右の手にさげている。この渋紙包の一つには我輩の寝巻とヘコ帯が這入はいっているんだ。左の手にはこれも我輩のシートを渋紙包にして抱えている。兩人とも両手が塞ふさがっている。とんだ道行だ。角かどまで出て鉄道馬車に乗る。ケニングトンまで二錢宛だ。レデーは私が払っておきますと行って黒い皮の蓐がまくち口から一ペネー出して切符売に渡した。乗合は少ない。向側に派は出でななりをしている若い女が乗っている。すると我輩の随行しているレデーが突然あなたはメリー・コレリのマスタークリスチアンを御読みなさいましたかと大きな声で聞いた。これは近頃十五万部売れたというちよつと有名な本だ。我輩は書物は持っているがまだ読まないと答えた。「あの本はね、大變善よ

くできているのですがね、どうも作者の宗旨が何だか分らないのですよ。私の知っている者なんか皆んなコレリの宗旨は何だろうって噂うわさして「いますよ」とますます向側の婦人に聞えよがしである。自分だつて読んだ事もないのに鉄道馬車の中なんかでよせば善いと思つたが、仕方がないからウンウンと生返事をしていた。やがてケニングトンに着ついた。ここで馬車を乗り換かえる。こんどは上へ上がらうと云うから階はしご子を登つてトップへ乗つた。「この左りにあるのが有名な孤児院でスパージョンの記念のために作ったのです。「スパージョン」て云うのは有名な説教家ですよ」「スパージョン」ぐらい講釈しないだつて知つていら、腹が立つたから黙つてやった。「だんだん木が青くなつて好い心持ですな、二週間ぐ

らい前からズツト景色が變つて来ましたね」「さよう、時にあすこに並んでいるのは何んて云う樹きですか」「あれ？ あれはポプラーでさあね」「へエーあれがポプラーですか、ナールほど」我輩は感嘆の辞を発した。神かみさんはすぐツケ上る。「ポプラーはよく詩に咏じてありますよ、「テニソン」などにも出ています。どんな風の無い日でも枝が動く。アスペンとも云います。これもたしか「テニソン」にあつたと思います」と「テニソン」専売だ。そのくせ何の詩にあるとも云わない。我輩は面倒臭いという風でウンウン云うのみである。向うの敷石の上を立派な婦人が裾すそを長く引いて通る。「家の内での御引きずりには不賛成ありませんが、外であんな長い裾を引きずって歩ある行くのはあまり体裁の善い

ものではありませんね」と裾短かなるレデーは我輩に教うる処あった。ようやく「ツーチング」という処へつく。今度は円太郎馬車で新宅の横町の前まで来た。「どれが内ですか」と聞いた。向うに雑な煉瓦造りの長屋が四五軒並んでいる。前には何にもない。砂利を掘った大きな穴がある。東京の小石川辺の景色だ。長屋の端の一軒だけ塞がっていてあとはみんな貸家の札が張っている。塞がっているのが大家さんの内でその隣が我輩の新下宿、彼らのいわゆる新パラダイスである。這入らない先から聞しに劣る殺風景な家だと思つたが、這入つて見るとなおお不風流だ。しかのみならずどの室にも荷物が抛り込んであつてまるで類焼後の立退場のようだ。ただ我輩の陣取るべき二階の間だけが少しく

方かたづい付てオラレブルになつてゐる。以前の部屋よりも奇麗きれいだ。装飾もまず我慢できる。やがて亭主が出て来て窓掛をコツコツ打ちつける。ストーヴの上へ額をかけるが「ミツスルトー」という額はいかがです、あれは人によると嫌いますがちよつと御覽に入れましよういっと云て持つて来て見せた。何でもない裸体画の美人だ。

「ハハ―裸体画ですな、結構です」と冗じょうだん談半分くぎにいつたら「へへへ私もちつとも構いませんがね」とコツコツ釘くぎをうつてかける。「どうですこれで角度は……もう少し下向に……裸体美人があなたの方を見下すように——よろしゅうございます」。それから我輩の書棚を作つてやるといつて壁の寸法と書物の寸法をとつて「グードナイト」といつて出て行つた。

門前を通る車は一台もない。往来の人声もしない。すこぶる寂せきりよう

寥寥たるものだ。主人夫婦は事件の落着するまでは毎晩旧宅へ帰つて寝なければならぬ。新宅には三階に寝る妹とカーロー君とジャック君とアーネスト君である。カーロー君とジャック君は犬の名であつてアーネスト君はこの主人の店に使っている若き人間の名である。我輩の敬服しかつ辟へきえき易するベツジパードンは解雇されてしまった。我輩は移転後にこの話を聞いて慄然ふぜんとして彼の未来を想像した。

魯西亞ロシアと日本は争わんととしては争わざらんとしつつある。支那は天子蒙塵てんしもうじんの辱はずかしめを受けつつある。英国はトランスヴハールの金剛石を掘り出して軍費の穴を填うめんとしつつある。この多事なる

世界は日となく夜となく回転しつつ波瀾はらんを生じつつある間に我輩のすむ小天地にも小回転と小波瀾があつて我下宿の主人公はそのぼうだい彪びょう大なる身体を賭としてかの小冠者差配と雌雄しゆうを決せんとしつつある。しかして我輩は子規の病気を慰めんがためにこの日記をかきつつある。四月二十六日。

# 青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年11月13日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 倫敦消息

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>